
ピンクちゃん

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピンクちゃん

【Zコード】

Z6750Z

【作者名】

きみよし敷太

【あらすじ】

ピンクちゃんは欠陥ものの使い捨てライター。

火がつかないという致命的な欠点で捨てられるようになるけれど、何度も奇跡に助けられてる。

ピンクちゃん、君に祈りをこめた女の子が今夜も男の人を待つているよ。

ピンクちゃん、そんなの全然君には関係ないんだけどね。

その赤いライターには、白く小さな字でお店の名前と電話番号が入っている。赤に白を混ぜた色だからと言って、そのライターの事を真理ちゃんは「ピンクちゃん」と呼ぶ。ピンクちゃんは真理ちゃんのスース、左ポケットで最近を過ごしている。お店のママに捨てられそうになつたピンクちゃんを、拾つてくれたのが彼女だからだ。ピンクちゃんは普通のライターなのだけれど、少なくとも外見上は「ぐぐく」一般的なライターなのだけれど、ちょっととした弱点がある。そして、そのウイークポイントはピンクちゃんの最大のピンチを何度も運んできている。

ピンクちゃん、ライターなのに火が点かないのだ。

それは生産された時点からの欠点で、どこが悪かったのか何が原因だったのか、ピンクちゃん本人にもちつとも分からなくて、オイルは充分に入っているし、ピンクちゃん自身も小さなボディにはちきれそうながらに頑張りで充满しているのだけれど、やる気はまるで空回り。どんなに頑張つても、ほんの小さな火花を見せたり見せられなかつたりする程度。

その役立たずなライターは、もちろん使い物にならないので、最初に渡されたお客様さんから返されて来ていた。

「ママ、これ使えないよ」

ピンクちゃんが身体に刺青している名前と電話番号は、ちょっとした繁華街の中、古いビルにあるスナックのもので、ピンクちゃんにとってその事はとても有利に働いた。普通ならぼいと捨てられてしまつて、はいそれまでよの人生だつたはずが、お客様さんがママの、「あら、ゴメンナサイねえ」と鼻にかかる甘い声が聞きた以為に、お店に連れて帰つて来てくれたのだ。

ママはもちろん役立たずなピンクちゃんをうりやつと捨てようとしたのだけれど、幸いな事にまたしても救いの神が現れた。それが

ピンクちゃんの現在の存在場所をくれていて、真理ちゃんだった。

「あ、ママ、捨てちゃうならそのライターくださいな」

あらやだわ、変なもの欲しがる娘ねえ、とこひろり笑いながらも、ママは可燃物の「ミミ」としてライターを捨ててもいいものかと迷っていたので、別に「ミミなんかくれてやつても、と思つてピンクちゃんを真理ちゃんにあげた。

真理ちゃんがピンクちゃんを救つたのには、ちよつとした事情があつた。

彼女はスナックの中でも一位一位を争つ、美人ではない娘なのだ。もちろん、そういうお店に勤めているのだから、不細工って訳じやない。でも、真理ちゃんはどうちらかといえば可愛い、田舎っぽい顔で、ファンデーションを取れば鼻の上にそばかすが散っているのが悩みだった。そして、彼女はあるお客様からプロポーズされているのだ。

そのお客様さんは飯田さん。髪の毛だけはふさふさといっぱいあるのだけれど、背は低いし、ぱつぱつした体格をしている。年だつて、そんなに若くない。彼の年齢なら、結婚して子供がふたりほど居てもおかしくないくらい。

彼は実家で作ったのだと、ジャガイモやトマトを店にお土産として持つてくるので、従業員や常連さんからは少し笑い者にされているような人だった。

悪い人ではない。

いい旦那さんになりそうな、いいお父さんになりそうな、老後も夫婦で美味しいお茶が飲めるであろう、ふくふくとした人だ。今まで貢ぐだけ貢がせるような男ばかりを恋人にしてきた真理ちゃんには、彼のプロポーズは嬉しかったし、お嫁さんになれる自分というのにくらべたりもした。

けれども。けれども、と真理ちゃんは思つ。

私だって一応夜の女、燃えるような恋の方がお似合いなのじゃな
いかしい。

プロポーズの返事はいつでもいいよ、と言われている。

でも、やっぱりいつまでも待たせておけるものではない。

真理ちゃんはピンクちゃんを飯田さんに渡して、返事をするつも
りだった。

『ごめんなさい、あなたじゃこのライターと同様に、私の心に火を
点けられないわ……』

そう言つて。でも、本当は真理ちゃんも悩んでいるのだ。おばあちゃんの家は農家だつたし、農業だつてお手伝い程度だけれど多少は出来たりする。飯田さんはいい人で、今までの恋人達に比べたら、真理ちゃんはとても幸せにして貰えるだろう。そういう人は、優しいオーラが出ているからちゃんと分かる。

ただ、夜の女としての、プライドが。
人はそんなもの、邪魔だというだろ。馬鹿なつまらないプライドで、幸せを逃すなんて救いようがないと。

店のドアが開く度、真理ちゃんはスーツのポケットの上からピンクちゃんをそつと押さえる。硬い感触。お店に入ってきた人が飯田さんではないと知ると、途端に真理ちゃんはほっとする。
ほっとする真理ちゃんなのだけれど、どこか寂しい気もしてしま
うのだ。

今夜も来ないのかしら。

どうしてだろう、断ろうと思つていてるのに、飯田さんを待つてい
るどきどきした気分のようなものを味わつてしまつのは。

ピンクちゃんはもちろんそんな事知らない。ただ、そこにあるだけ。ピンクちゃんに、ひとりの人、いや、ふたりの人の人生がかかつているなんて知るよしもない。

ただ、ピンクちゃんは真理ちゃんのポケットにすっぽりと収まつ
ている。

真理ちゃんは神様に祈つてしまつ自分に気付いていない。もしかして、このライターが一度でいいから火を点けたりしたら、なんて。一度でいいから奇跡が起きてくれたら、なんて。

ピンクちゃんは何も知らないので、祈つたりも何もしないし、こんなに自分が大切な任務を負わされているなんて気付いてもいない。

捨てられないといいね、ピンクちゃん。

ピンクちゃんは、奇跡を身に纏えるのかしらね。

赤いライターは、そして今日も祈る女の子のポケットの中で、直接自分には関係のない男を待つていたりするのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6750n/>

ピンクちゃん

2010年10月8日14時21分発行